

(様式 11)

平成 25 年 8 月 21 日

学 位 論 文 審 査 要 旨 (課程博士)

東京農工大学大学院工学府長 殿

審査委員	主査	黒田 裕	印
	副査	朝倉 哲郎	印
	副査	小関 良宏	印
	副査	中村 暢文	印
	副査	尾高 雅文	印
	副査		印

学位申請者	生命工学専攻 平成 22 年度入学 学籍番号 10831109
	氏 名 Mohammed Monsur Alam Khan
申請学位	博 士 (工学)
論文題目	短いペプチド系タグを用いたタンパク質の溶解性及び凝集の生物物理学的解析 Biophysical analysis of protein solubility and aggregation using short amino acid peptide tags
論文審査要旨 (2000 字程度)	
<p>凝集は、分子の濃度が溶解限界濃度（以下、溶解度）以上になると起きる現象であり、タンパク質やペプチドの凝集は産業利用においてしばしば問題となるほか(Frokjaer S et al, <i>Nat Rev D. D.</i> 2005)、種々の神経変性疾患の病因であると考えられている(Ross CA, <i>Nature Med</i> 2004)。現在、ペプチドやタンパク質の溶解度は構成アミノ酸の親水性・疎水性で決まるというのが定説であるが、本来このモデルは、水溶液及び非極性の有機溶媒に対する相対的な「溶けやすさ」を示す理論であり、水溶液中での溶解度を解析するための理論ではない。また、高濃度の分子の溶解度を正確、かつ再現性よく測定することが極めて困難であるため、疎水性・親水性の代わりとなるアミノ酸の「溶解性」の真の指標はまだ開発されていない。</p> <p>博士論文で、学位申請者は、高濃度では測定が難しいアミノ酸の溶解度そのものを測定するのではなく、変異体解析によって、アミノ酸の水溶液中での相対的な「溶解性」（以下、溶解傾向性）を測定する手法を開発している。</p>	

(様式 11)

論文審査要旨

第1章「緒論」では、タンパク質の溶解性及び凝集に関する研究の背景を説明している。溶解性に関する物理化学的な研究、親水性・疎水性と溶解性との関係に関して詳しく述べ、本研究で対象とした溶解傾向性の定義を行っている。さらに、タンパク質の凝集に関連する研究を概説し、現在までに開発されている、物理化学的な視点による研究を紹介している。次に、様々な変異体解析においてタンパク質科学で一般的に用いられるホストゲスト法や置換の効果の加算性について説明を行っている。最後に、アミノ酸置換によるタンパク質の溶解性変化の予測を行うことの意義について述べ、各章の意義と目的について述べている。

大2章では、20種類中 Arg, Ile, Lys, Ser, Asp, Asn, Gln, Glu, Pro, His の10種類のアミノ酸の溶解傾向性の測定とその結果を説明した。溶解傾向性の測定では、解析対象となるアミノ酸を、「基準ペプチド」に5個付加した変異体を構築し、溶解度を遠心分離法を用いて測定した（アミノ酸を5個付加するのは、現在までの研究で1, 3, 5個のアミノ酸と付加した結果、5個の時の溶解度変化の測定が最も容易であったためである）。溶解傾向性は、変異体ペプチドと基準ペプチドの溶解性比と規定した。遠心分離法は、白濁が少々見られる状態のサンプルを20,000gで30分間遠心し、可溶性画分に残るペプチド濃度をトリプトファンの吸光度から測定し、その値をペプチドの溶解性と規定する。本研究では、溶解傾向性をpH4.7と8.7の2つのpHで測定したことで、親水性・疎水性モデルでは考慮されていなかったpH依存性をアミノ酸の溶解傾向性に初めて取り入れている。

第3章では、凝集形成の速度を調べている。凝集形成速度は、前章で説明した遠心分離法を用いた手順で、サンプルを溶解して0分～96時間経過したのちに溶解性を測定した。その結果、ペプチド濃度があるしきい値より低い場合は、凝集は見られず、溶解性は変化しなかった。一方、ペプチド濃度がしきい値以上のサンプルの溶解度は時間が経過するにつれて、低下し、最終的にはしきい値以下の濃度に落ち着いた。さらに、しきい値は付加したアミノ酸種によって異なり、前章で求めた各アミノ酸の溶解傾向性と相関が高いことを明らかにした。以上のことから、タンパク質を高濃度で可溶化する際には、そのタンパク質特有のしきい値濃度以下に調整することで、溶解した状態を長期に保てることが明らかとなった。その為、それぞれのタンパク質のしきい値濃度が長期保管に於いて、重要な指標である。さらに、理論的な観点からは、しきい値濃度の存在は、凝集形成には核の形成が必須であることを強く示唆している。凝集はOosawa & Kasai (1962) が提唱した Helical Polymerization Model に従って成長すると、第一次近似的に考えられる。

第4章では、2章と3章で説明した結果を総括し、今後、全20種類のアミノ酸の溶解傾向性を測定することで、任意のアミノ酸配列からなるペプチドの溶解性をpH依存的に予測することが可能となると結論付けている。

これらの研究成果は、タンパク質分子の凝集および溶解性を理解する上で重要な知見であると評価し、学位申請者は博士（工学）の学位として十分な能力を有するものと認める。